
路

天月黎璽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 路

【Nコード】
N7774S

【作者名】
天月黎璽

【あらすじ】
私は路に迷い込み、路を駆け巡り、そして路を見出した。

私は逃げていた。逃げ続けていた。何か？「何か」から。私は得体の知れない何かから逃げ延びる為、夜の町を走り回っていた。運悪く、私は遭遇してしまった。偶々用事ができ、いつもなら既に家に居るはずの私は、今普段は通らない路を歩いていた。嗚呼、今思えば、あの路さえ通らなければ……あの暗い、暗い、闇への入口に足を踏み入れたばかりに……。

空のその殆どを厚ぼったい雲が覆っていた。町に灯りは灯っていたが、人影は全く無かった。自分の知っている昼の町、日の光が降り注ぐ世界とは異なる世界が、そこには広がっていた。光が全く無いよりも、一層に闇が深まって観えた。そんな世界を、子供の様に無邪気に楽しみながら歩いていたのが、嘘の様だ。私が闇の恐ろしさ、闇に潜むものの恐ろしさを知ってしまったからだ。

生温い闇の中を歩いていると、次第に町の灯りは消えてゆき、辺りは一層深い闇に包まれた。私は、ふと、路の先に妙な気配を感じた。「何か」居る。何故か、直感的にそう思った。歩みを止め、闇に目を凝らす。やはり何か居た。ただ、鈍よりとした闇の中では、いくら目を凝らしてもハッキリとは見えなかった。その時、丁度良く、いや、悪く、厚い雲の切れ間から光が差した。

月の光に照らし出されたそれを見て、私は声に成らない悲鳴を上げた。幻想的な光の下に居たその姿の何とおぞましいことか。蛇を蠶の様に生やした頭には眼、鼻が無く、口だけがグワバツ、と裂けており、人の身体など容易く貫くであろう杭の如き鋭い歯が、ズラリと並んでいる。全身は黒く、変に光沢がかっている。手足にはクレーンのフックの如き巨大な鉤爪があり、スラリと伸びた尾の先は鋭く尖っており、槍の様でも、また、蠍の様でもあった。そしてその大きさは、大型犬よりも一回りも二回りも大きなものであった。私は逃げ出したかった。直ぐにその闇の中から立ち去りたかった。

しかし、あまりの恐怖に身体は云うことを利かず、ただ闇雲に頭だけが働いた。さあ、逃げよう！どうした？動け！早くここから逃げるんだ！動け！動け！この闇から逃げ出すんだ！早く！早く！さもないと、あの獣に、あの恐るべき闇の獣に、いや、あれは闇そのものだ！喰われてしまう！さあ！動け！私よ、動いてくれ！自分自身へ向けて必死に念じ、震える脚を、身体を動かそうとした。だが、全く動かない。冷や汗が頬を伝いポタポタと流れ落ちる。倉皇している内に、獣はゆっくりとこちらへ向かって来る。とうとう私は腰を抜かしてしまい、尻餅を搗いてしまった。身体はガクガク震えるばかりで、後退りすら出来ない。尚も恐るべき闇はゆっくりと、だが着実にこちらへと歩み寄って来ている。嗚呼……頼む！動いてくれ！早くここから逃げるんだ！逃げろ！逃げろんだ、私よ！さあ、逃げろ！

獣があと二、三mと迫った所でただ震えていた身体は云うことを利くようになり、私は一目散に逃げ出した。一刻も早く、この闇から抜け出さなければ！私は走った。走りまくった。走って、走って、どれだけ走ったか分からない位走った。にもかかわらず、一向に闇から抜け出せない。いつまで経っても、生温い闇が延々と広がっていた。

無我夢中で走り続けていたが、流石に体力の限界が訪れた私は、フラフラと倒れ込んだ。ゼエ、ハア、と息を弾ませながらも身を起こそうとした、その時、先程と同じ気配を感じた。恐る恐る、顔を上げると、前方からあの獣が歩いて来るのである！私は肝を冷やした。力を振り絞り、すぐさま立ち上がり今さっき駆け抜けてきた路を引き返した。疲労した身体に鞭打ち走っていると、なんと、向こうから獣がやって来るではないか！いよいよ私は肝を潰し、右往左往した。同じ所をグルグルと駆け巡り、ひたすら闇の中をさ迷った。だが、どこへ逃げても、その先にはいつもあの闇の獣いた。追い詰められたら私は、路地へと逃げ込んだ。だが、進んだその先は行き止まりであった。絶望が私を襲い、とうとう全身から力が抜け切

つてしまった。ガクリと膝を突き、身体を捻曲げ振り返ると、そこにはやはり獣が居た。あの路さえ通らなければ……あの暗い、暗い、闇への入口に足を踏み入れたばかりに、こんなことに……。後悔したところで、今のこの状況が何も変わりはないことは分かっている、後悔せずにはいられない。そうだ。どうして助けを求めなかったんだ！あの時、もっと冷静でいられたら……。そもそも、用事が無ければ、用事さえ出来なければ……。！嗚呼……。

獣はすぐ傍まで来ていた。既に希望を見出すのを諦めていた私は、その場に座り込み、唯々ぼうつ、と獣を眺めていた。これから、あの鉤爪で肉をズタズタに引き裂かれ、あの顎で骨を噛み砕かれるのだ……。これが己の運命だと覚悟を決め、それを受け入れる気持ちでいた。獣はすぐ目の前に迫っていた。瞼を閉じた。さようなら。私は恐るべき闇の獣に、いや、獣の姿をした闇に食われ、その存在を終わらせるのだ。さようなら。さようなら……。

……どうしたことが、その時は一向に訪れない。恐る恐る、薄らと目を開ける。やはり目の前に居る。しかし、襲ってくる気配は無い。いや、そう思った時、蠶の様に生えた幾つもの蛇がシルシルと私に向かって伸びてきた。いよいよか、と思った。蛇たちは頭に纏わり付き、蠢いている。しかし、それ以外に何もしてこない。暫くすると、蛇たちはシルシルと戻っていった。獣は、唯その場でジツとしていた。私は獣が何をしたいのか、理解出来なかった。一体、こいつは何がしたいんだ？油断させておいて、いきなり喰らいつくつもりだろうか？それとも私を食べるつもりは更更無かったのか？なら、何で私を追って来たんだ。まさか、友達に成りたい訳ではあるまい。等と考えていると、獣はゆっくりと闇に溶け込んでいき、姿を消してしまった。私は暫く呆然としていた。一体、何だったのだろうか……。

ふと、空が薄らと明るくなってきているのに気がついた。そうして、遠くに眩しい光が昇るのが眼に映った。いつの間にか夜は明け、あつという間に光が闇を追い遣っていった。私はゆったりと立ち上

がると、朝日を浴びながらトボトボ家へと向かった。

帰宅した私は、顔を洗おうと洗面所へ足を運んだ。鏡の前で見たものは、顔に青黒い蚯蚓腫れのような痣が幾つもあり、眼が爬虫類のものの様に成った自分の姿だった。すっかり疲労していたこともあり、自分の身に何が起きたのか、直ぐには理解出来なかった私は、フラフラ寝室へと向かうとベッドに倒れ込み、そのまま深い眠りに落ちた。

真つ暗な闇の中で目を覚ました。何が起きたのか分からずにいると、あの獣が現れた。ヒヤリとした。だが、獣は、やはり何もしてこない。突然、声がした。

「我が視えるお前に我の眼を、鼻を与える。有効に使え。」

そこで目が覚めた。外は明るい。まだ朝、だと思ったら、もう朝の間違いだった。私は丸一日眠っていたのだ。ベッドの上で夢のことを考えた。あの声は……まさか、あの獣の！？だとしたら、アイツの「眼と鼻を与える」とは、一体どうゆう……。

暫くして、私はあの夢の言葉の意味を理解した。私はあらゆるものの陰、闇と闇に潜むものの存在が視え、その「匂い」を嗅ぐことが出来るようになっていた。そして、度々あの獣にも出会っている。獣は言う、「闇を喰らう闇で在れ」と。

そうして、私は有り触れた日常を送るのを辞めた。手にした力でもって、更なる力を得たからだ。新しく生まれた路を行くとする。

これからの私は闇を喰らう闇、闇の獣の後継者、そして恐るべき代行者として在ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774s/>

路

2011年6月28日02時25分発行